キハダ

Phellodendron amurense

ミカン科

キハダ。雄花が咲いている

名前の由来
幹の内皮が黄色いことから（黄肌）。別名、シコロ（アイヌ語由来か）。漢字名：黄檗

形態的特徴

山地や平地に生える落葉樹、樹高25m。雌雄異株。葉は対生し、奇数羽状複葉で長さ20～40cm。小葉は５～13枚、卵状長楕円形で先はとがり、長さ５～10cm、ふぞろいな鈍鋸歯縁（ゆるやかなギザギザ）、主脈に白毛がある。樹皮は淡褐色で、厚いコルク質。縦に裂け、内皮は鮮やかな黄色。花は雌雄異花、黄緑色で径約８mm、円錐花序に多数つく。花軸には褐短毛を密生、花弁は５、雌花の柱頭は褐色で退化した雄しべ５本があり、雄花の葯は黄色で５本の雄しべと退化した雌しべがある。６～７月に開花。果実は径８～10mmの球形、９～10月に黒熟。（葉や花序に毛がなく小葉の幅がやや広く、樹皮のコルク質が薄いものをヒロハノキハダと呼ぶことがある）

類似種との見分け方：キハダの枝先はヤチダモやオニグルミのように太くならない。樹皮がコルク質ならキハダ。また、キハダの樹皮をはぐと鮮黄色をしている。キハダの実は柑橘系の臭いがする。キハダはハルニレ林などに少ない割合で混交することが多い。

キハダの雄花

キハダの雌花

キハダの実。熟すと黒くなる

キハダの葉。これで一つの葉（羽状複葉）。ふぞろいな緩いギザギザがある。主脈に白い毛。

キハダの樹形

キハダの樹皮。コルク質で柔らかく、内皮は黄色い

キハダの冬芽。半球形で２～４mm、対生

キハダ。枝先の葉と雄花のつぼみ

生活サイクル

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
開　花　期			―	―								
結　実　期						―	―					

生育環境・分布

山地や平地の水辺等に生育する。土壌：埴質壌土、肥沃土、適潤性～弱湿性、通気性は中程度の場所、ｐＨは中性、堅密度は中程度の場所。陽性木。

分布：国外分布は、朝鮮、中国東北部、アムール、ウスリー。国内分布は、日本各地。北海道内分布は、全域。十勝地方生育状況は、全域。

キハダ

繁殖生態・寿命

花期は６～７月、果実は９～10月に熟する。鳥や動物によって種子分散される。寿命は200年。

他生物との関わり

アゲハチョウ、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、ルリシジミなどの幼虫の食樹。鳥や動物によって種子分散される。

ミヤマカラスアゲハ。幼虫時、キハダを食樹とする

植栽関係

土壌：埴質壌土、肥沃土、適潤性～弱湿性、通気性は中程度の場所、ｐＨは中性、堅密度は中程度の場所。陽性木。実生による。取り蒔き、または秋に採取した種子を土中保存し、翌春に植える。挿し木や移植は困難。樹齢40年で、直径16cm、樹高7m、根系の最大深度190cm、根の広がり半径1.5m。根の支持力は弱い。移植難易度は難（落葉時は容易）。表土が深い場所に群落をつくる。切り株からは萌芽することは少ない。挿し木では活着しない。

興味深い話

■公園樹などに用い、内皮（黄柏）を薬用に用いる。漢方では樹皮を黄柏と言い、整腸薬として用いる。奈良県でつくられる腹痛薬「陀羅尼助（だらにすけ）」はこれを材料としている。内皮は黄色の染料とされ、防虫作用があるため、写経をする紙もこれで染めた。材は美しく重宝され、家具や工芸具、器具、建築材として用いられる。

■キハダの花は、ハチミツの蜜源として重要である。

■キハダは黄色染料として中国から伝わったが、中国では最上階級の服装の色（黄色）をキハダで染めたのだという。

■十勝地方のアイヌ語では「シケレペニ」という。

■キハダの実をアイヌ語で「シケルペ（ぬるぬるした実）」という。キハダの実は、霜が降りる前にとり、乾燥させて保存し、一年を通じて食料や薬として欠かせないものだった。実を浸しつけた汁は最初は捨てるが、数回取り替えた黒い汁に水飴や蜂蜜などを入れて煮詰め、せき止めとする。長時間煮詰めた実をなめると風邪に効くという。また、アイヌは黄色を尊び、信仰に関わるもののみをキハダで染めたのだという。

配慮事項

樹齢40年で、直径16cm、樹高7m、根系の最大深度190cm、根の広がり半径1.5m。根の支持力は弱い。移植難易度は難（落葉時は容易）。表土が深い場所に群落をつくる。切り株からは萌芽することは少ない。挿し木では活着しない。

参考文献

「図説花と樹の大事典」木村陽二郎 監修　植物文化研究会・雅麗 編集　柏書房　1996

「アイヌ植物誌」福岡イト子　草風館　1995

「新装版　樹木根系図説」苅住昇　誠文堂新光社　1987

「日本のチョウ」上野明雄　小学館　1981

「北海道　庭と庭木のすべて」原秀雄・須田輝　北海道新聞社　1978

「新版 北海道の樹」辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫　北海道大学図書刊行会　1992

「日本の野生植物　木本Ⅰ」佐竹義輔・原寛・亘理俊治・冨成忠夫 編　平凡社　1989

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会　2004

「知里真志保著作集 別巻Ⅰ　植物編・動物編」知里真志保、平凡社、1976

「天然林施業Q&A」石塚森吉ら　北方林業会編　pp.107-108 1988

萌芽更新を利用した広葉樹の施業　佐藤俊彦　年－巻号：　光珠内季報　1999－116

緑化樹の用土別によるさし木発根成績　吉川栄二　光珠内季報23号　p:11～p:13 1975